

FUEIKI

vol.80

地道な活動、幅広い活動に光を当てる

福武教育文化賞

2個人、3団体に贈る



こばやしてるなお
小林照尚 (彫刻家/岡山市)

もりのみさき
森野美咲

(ソプラノ歌手/岡山市出身/ウイーン在住)

うえだてすきわしろうじょう
上田手渡和紙工場

(6代目 上田繁男、7代目 上田康正/津山市)

おはなしのW.A. (代表 遠藤寛子/岡山市)

ズンチャチャ (代表 須原由光/倉敷市)

福武教育文化賞は、高い志を持ち、先駆的で地域への波及効果がある活動に取り組んでいる個人・団体を対象に顕彰しています。2022年度は、2個人3団体に贈りました。式典では、受賞者からこれまでの活動、そしてこれからの活動について発表。今年度も多様なジャンルから素晴らしい受賞者の皆さまをお迎えすることができ、改めて岡山県の教育文化活動のひろがりを感じました。(11月12日、岡山市内ホテル)



創作の傍ら地域の 芸術文化の支援にも尽力

小林照尚 (彫刻家/岡山市)



表彰理由

実力派作家として多彩な作品を手掛け、県内各地に設置された屋外作品やモニユメントは地域の人々に親しまれ、作品を通して多くの感動を与えている。作品内容の多彩さ、活動範囲の幅広さは彫刻家として極めて独自性が高く、他の作家を刺激する存在となっている。また、自身の制作のみならず、地域と文化の観点から、人と人との出会い、新たな感動を生み出すことで地域文化の活性化を目指す活動に取り組む、岡山県の地域振興に大きく貢献している。

主な取り組みと実績

塑造彫刻を学んだ岡山大学大学院修了後、手掛けたことのない大理石彫刻を学ぶためイタリアに留学し、帰国後、岡山市の特産品である花崗岩の万成石に魅せられ、多彩な作品制作を通して、その魅力を発信している。岡山県現代彫刻選抜展や、汎瀬戸内現代美術展、岡山芸術回廊など、多くの展覧会に出品。屋外作品・モニユメントでは、内田百閒生家跡の『牛』、岡山県総合グラウンド内の木原光知子顕彰碑『泳縁の碑』、仙台市彫刻のあるまちづくり作品『子供の領分・夢見る時代』の他、県内外で多くの作品を手掛け、彫刻家としての実力を認められている。

また、近年ではチームで雪像アートにも取り組み、国内外で上位に入賞するなど幅広い活動に取り組んでいる。自身の制作活動のみならず、地域の芸術家や文化活動を支援することを目的に一般社団法人レンドウを設立

し、代表理事を務め、地域と文化、地域と人などさまざまな出会いや親交を図りながら地域文化の活性化を目指す活動を行い、更に地元ゆかりの作家の顕彰にも尽力するなど、幅広い取り組みを展開している。また、岡山県美術家協会の事務局長も務め、美術を通じた文化振興にも貢献している。

受賞者の言葉

この度は名誉ある福武教育文化賞をいただきましてありがとうございます。皆様からの多大なサポートやアドバイス、そして影響を受けながら、時にはいろいろと波もありましたが、今日まで造形活動を続けています。関係の皆様には感謝をいっぱいします。

私の作業場は、岡山市北区の採石場の一角にあります。ここで産する万成石(通称さくら御影・花崗岩)の魅力に惹かれ、作品制作しています。これからは素晴らしい石の可能性を追求し、さらに、新しい活用も模索しながら、万成石産業の発展に貢献したいと思います。

また、地域文化・芸術による繋がりと連携に取り組む「一般社団法人レンドウ」を立ち上げて、すでに10年を超えました。地域と人、芸術などの関わりを活かした活動をこつそりですが続けています。今後とも今までに得た経験や出会いを踏まえ、今やれることを企画やイベントなどのかたちに変えて発信していきますので、今後ともよろしく願います。

国際的な水準の音楽を

岡山の地にも紹介

森野美咲

(ソプラノ歌手/岡山市出身/ウィーン在住)



表彰理由

新進気鋭のソプラノ歌手として、国内はもとより国際的にも活躍し、その実力は高い評価を得ている。ウィーンを拠点にヨーロッパと日本で演奏活動を続け、活動の幅を広げているが、岡山は必ず帰るべき原点の地として、県内で演奏活動を行うなど、岡山の音楽文化芸術の振興に貢献している。国際的な水準の音楽を岡山の地にも紹介してくれる貴重な存在として、次世代の音楽家にも影響を与えるなど、今後、更に大きな役割を果たすことが期待される。

主な取り組みと実績

若手ソプラノ歌手として、現在ウィーンを拠点にヨーロッパと日本で演奏活動を続けている。パロックや現代音楽、オペラ、日本歌曲などレパートリーが幅広く、中でもオペレッタやドイツ歌曲に定評がある。

東京藝術大学卒業後はウィーンに留学し、2014年ガルス音楽祭でヨーロッパデビューの後、ウィーン・コンツェルトハウス、シエーンブルン宮殿劇場、ウィーン楽友協会、パロツコ劇場等で数々のオペラやコンサートに出演している。2019年にはウィーンフィル夏のアカデミー『偽の女庭師』題名役でオーストリアツアラーを成功させ、プロ野球オールスター戦開幕式で国歌独唱も務めている。また、岡山フィルハーモニック管弦楽団との共演となる『ヨロソ』へ出演し、地元岡山から巣立って行くこととする次世代の若者に勇気と感動を与えている。2022年にはオーストリア・バーデン市立劇場で『椿姫』の題名役に抜擢され、実力

が高く評価されている。その他、東京オペラシティでのリサイタルシリーズ『B・J・C』にも抜擢され、自身が作詞をした歌曲集『はじまり』を世界初演し、ソロリサイタルをさせた他、東京交響楽団などとも共演するなど、国内外での活躍の幅を広げ、音楽文化の振興に大きく寄与している。

受賞者の言葉

この度は福武教育文化賞という栄えある賞を頂戴し、誠にありがとうございます。私は2011年より音楽の都と呼ばれるウィーンに拠点を移し、今日まで研鑽を続けてきました。歌うことは心の栄養と言います。音楽にはどんな境界線もありません。どんな時代にも、音楽というものは必ず人の心に寄り添い、支え、道しるべになってきました。

2022年の今日、世界を渡り歩くことが容易でない時代となりました。しかし同時に、YouTubeなどのソーシャルメディアを通じて、誰もが世界中と繋がれる、そんな可能性の広がる時代にもなったと感じています。世界のどこにいても、私の心はいつでも故郷の岡山と繋がっている、そんな感覚があります。

私の声を通じて人と繋がって行けることが、私の人生の楽しみですし、そのような活動が、これからの若い世代の可能性の広がりを通じていければ嬉しいです。これからも感謝の気持ちを持って、アーティストとして精進し続けたいです。

紙漉き体験などを通じて 箔合紙を普及

上田手漉和紙工場

(6代目 上田繁男、7代目 上田康正/津山市)



表彰理由

津山横野和紙、箔合紙を製造する唯一の工場として、伝統工芸に数少ない手漉和紙の継承・保存に努め、その希少性と、重要性は全国的にも高く評価されている。これまで積み重ねてきた歴史を存続させるため、工房の見学や紙漉き体験などを通じて箔合紙の普及にも努めており、技術や文化を継承し、若い世代へ伝え守っていくために極めて重要な役割を果たしている。岡山県の伝統工芸を守り続けていく、かけがえない存在として今後の更なる活躍が期待される。

主な取り組みと実績

上田手漉和紙工場で作られる箔合紙は、正倉院文書に記された美作紙の伝統技法を受け継いでおり、強く美しく光沢となめらかさ、野性味ある素材感などから海外での評価も高く、東京2020オリンピック、パラリンピックの大会関係者への記念品として選ばれた。

また、伝統文化を存続させるために、工房の見学や紙漉き体験を行っており、地元の学生をはじめ、他地域の人々にも津山の産業に触れてもらう活動を行っている。地元小学校では、1年生から年に1回紙漉き体験をし、地元文化祭で和紙を使った作品を発表したり、5年生になると紙漉き時に使うトロアオイの栽培、収穫、和紙の原料の三椏(ミツマタ)のへぐり(黒皮をそぐ作業)、川ざらし(川の水に晒しあくを抜く作業)を体験する。小学6年生の12月には工場を訪れて自分の手で卒業証書の紙を漉き、世界に一枚だけの卒業証書を作るなど、紙

漉き体験などを通じて箔合紙の普及に取り組んでいる。

日本の伝統工芸としての和紙の魅力を、国内だけでなくとどまらず、全世界に広げていきたいと、日々継承・発展に尽力している。

受賞者の言葉

この度、福武教育文化賞という名誉ある賞をいただき、身に余る光栄を感じております。

また、この賞が次代に良き盾になる事を信じております。日ごろからサポートしていただいている全ての関係者の皆様に感謝申し上げます。

箔合紙とは、金閣寺などに貼ってあるような金箔は、金を打って薄くし、その出来上がった金箔に箔合紙を挟んで輸送や貯蔵に使われ、金箔の保護をする役目。

金箔にはなくてはならないものです。

その箔合紙を守っていくために、文庫紙(便箋・封筒・葉書など)を漉き一般の人に使ってもらい横野和紙の特徴を知ってもらうこと。また、紙漉き体験を普及させ、現在では多くの学校に取り入れられ、特に地元小学校で自ら漉いた卒業証書づくりなど、現在では多くの人たちに知ってもらう事ができ、この賞につながったことと確信しております。

金箔には、なくてはならない箔合紙を、ますます精進し漉き続けていく覚悟です。

朗読文化の振興を 被災地支援に生かす

おはなしのWA♪

(代表 遠藤寛子／岡山市)



表彰理由

子どもたちへ朗読の楽しさを、元放送局アナウンサーであるプロの話し手が伝えるという独自性のある活動は、子どもたちのみならず、幅広い年代層にも支持されており、全国的な広がりが期待されている。特に、西日本豪雨で被災した兄弟犬の実話を絵本にした『プラーザーズドッグ』の朗読は、子どもたちの心に残り、防災意識の向上にも寄与している。朗読を通じての教育活動朗読文化の更なる振興に著しい貢献が期待される。

主な取り組みと実績

岡山県内を中心に活動してきた元放送局アナウンサーの有志が集まり、朗読を通して東日本大震災並びに西日本豪雨災害の被災地の復興を支援すること、また朗読による伝承や朗読の指導により、朗読文化の振興に努めることを目的として継続的な朗読活動を行っている。2013年から10年間継続している「3・11朗読と音楽と伝えたいこと」では、福島第一原発事故により一時全村避難を余儀なくされた福島県相馬郡飯館村の方が来岡し、飯館村の状況を伝えている。この縁で、東日本大震災の復興支援として飯館村の「いたてつ子未来基金」に浄財を送っている。(なお、2018年からは西日本豪雨災害復興支援の募金活動も行っている。)また同会のメンバーも飯館村を訪問するなど、被災地に寄り添った活動を展開している。2018年に起きた西日本豪雨災害で「あの日何があったのかを、絵本を通して後世に伝えたい」と、実際に真備で被災したロングコートトワフの兄弟犬の強い絆の話をもとに、絵本『プラーザーズドッグ』を発

刊した。絵本は、県下小学校400校への寄贈、売上金は被災動物支援団体等に寄付している。『プラーザーズドッグ』発刊後は、「子どもたちが読むプラーザーズドッグ朗読録音会」を開催し、朗読の指導をしつつ朗読の楽しさを伝える活動を行っている。これらの取り組みは、将来を担う子どもたちへ自然災害への備えの大切さを伝えるとともに、本離れが著しいとされる子どもたちが本に親しむきっかけにもなっている。

受賞者の言葉

この度は名誉ある賞を頂き厚く御礼申し上げます。

東日本大震災を機に結成したおはなしのWA♪は6人の小さな団体ですが、応援してくださる皆様と共に歩んでまいりました。被災地と繋がり、支援の朗読会等々を続け今年で12年目です。近年は私たちが制作した西日本豪雨災害を継承する絵本『プラーザーズドッグ』を題材に、防災意識の大切さと朗読の楽しさを子どもたちに伝える朗読録音会を開いています。また今秋から国立八ッセン病療養所邑久光明園の朗読ボランティアも始めました。

活動を続ける中で、人の声を通して表現する朗読の「伝える力」を実感します。報道の即時性とは違い、ゆっくりと心の奥底に根付き、いつか芽を出す種のように時を超えて育っていく力があると感じています。大人も子どもも取り組みやすいことが朗読の大きな魅力です。これからも朗読会や録音会等を積極的に行い、被災地の支援と、岡山の朗読文化の振興に貢献できるよう努めてまいります。

「一生青春ダンシング！」を 信条に意欲的に活動

ズンチャチャ

(代表 須原由光／倉敷市)



表彰理由

岡山県下においてコンテンポラリーダンスの普及啓発を先導的に担い、経験、世代、性別分野、地域を超えた、型にとられない自由な発想でパフォーマンスを行い、その可能性を体現している。地域に根ざした活動として、自らの作品創作だけにとどまらず、子ども、学生、成人など全世代に開かれた体験講座を長年にわたり継続するなど、岡山県の現代舞踊の振興にも貢献しており、今後更なる活躍が期待される。

主な取り組みと実績

「一生青春ダンシング！」を信条とするなんでも有りのダンスパフォーマンス集団として、1996年の結成以来、岡山・倉敷を拠点として、県外でも意欲的に作品を発表し、ポジティブなエネルギーを放ちながら進化し続けている。

代表の須原氏は、公演作品の演出、構成、振付、指導他、オリジナルの音創りや映像編集も手掛け、また、個人の魅力を最大限に引き出す演出、音楽やリズムを感じて踊ること、ふり幅の広い作風が持ち味である。一人ひとりの個性や人生、職業などのライフスタイルをモチーフとし、舞踊だけにとどまらず演劇や映像などの手法も生かしながら、多くの人が共感できるエンターテインメント作品を創造している。

公演の他にも、「ズンチャチャと踊ろうズンチャチャダンスワークショップ」の開催、ワークショップ生とズンチャチャメンバーとの共演作品の創作、岡山県や岡山市のアーティストへの

参加、地元の和太鼓グループやアートNPOと協働した作品創作など、幅広い活動を行っている。近年コロナ禍での創作活動は困難を極めたが、ウィズコロナ時代の公演の在り方を模索しながら25周年記念公演『BIRDS』を成功させ、鑑賞者からも高い評価を得ている。

受賞者の言葉

約26年前「ダンスの素晴らしさ、楽しさを仲間と共有したい。」という想いでズンチャチャを結成しました。何の自信も無い中、ただ踊ることが好き、ということのみを原動力に続けてきた、日々の稽古、オリジナルダンス作品の創作、公演活動は、今やライフワークとなりました。

そしてこの度、福武教育文化賞という輝かしい賞を授与いただきましたこと、深い感慨とともに「ご支援くださった皆さまに感謝でいっぱいです。偉大なるジョン・レノンの言葉に「ひとりで見える夢はただの夢。みんなで見える夢は現実になる」というものがあります。私たちがこの言葉通りのダンス人生を歩んできたように思います。

今後も「一生青春ダンシング！」の信条をもって、大好きなダンスを続けていくことと思いますが、そんな私たちの活動が、岡山の舞踊芸術の発展の一助となりましたら、これほど嬉しいことはありません。これからも皆様の心に残る作品づくりや、ダンスの魅力を発信できますよう、日々精進してまいります。

成果報告会発表者

11/24 (木)	大谷archive	門前町に暮らす人々、歴史・文化交流プロジェクト
	Bank Gallery@ENTER WAKE	[芸術を身近に] 学生等と作る和気町における文化の拠点づくり
	ありがとうファーム チームHUB Lab.	廃材をアート素材に。アイデア実験室「ハブラボ」
	La puerta	高校生と社会をつなぐボランティア人材の育成
	エディブル・エデュケーション岡山研究会	テラコヤ・エディブル in 岡山
	Nagi Art Space FIXA	奈義町の子どもから大人までの文化体験提供
	はじめての「第九」たまの実行委員会	はじめての「第九」たまの
アグリ魅力化支援会	農業就業人口増のための魅力アップ動画制作および普及啓発活動	

11/25 (金)	建都獣皮有効活用研究所	「ジビエレザーって? 考えてみよう地域のこゝろ」冊子作成
	つやま演劇教育研究会	環境劇上演ならびに環境番組制作を介した教育活動
	認定NPO法人オリーブの家	DV虐待に関する意識調査と地域の支援者への実態周知
	一般社団法人勲進プロジェクト	伝統建築工匠の技を記録。体験学習や教材としての映像化への取り組み
	チーム「なんで成羽でエジプトなん?」	レプリカを用いたワークショップ形式の出張授業
	Nagi国際交流ネットワーク	多文化共生社会のための地域の子どもと在留外国人の交流プログラム
	清心中学校・清心女子高等学校・倉敷青年会議所 理界村実行委員会	理界村実行委員会 生きる力学習カレッジ「理界村」2021

11/26 (土)	新見公立大学地域共生推進センター-SA	子どもから高齢者まで全ての人が気軽に集える場所づくり
	アテナの広場	こどものための「哲学対話」と「文化・芸術体験」～本質を捉え、本物に出会う
	特定非営利活動法人0-99おかやまおしえてネット	第2回子ども建築カレッジ「画家と建築家に教わる鳥瞰図」～空から見た建物を描こう(コロナのため開催延期)
	彦崎地区伝統文化・文化財保存会	出前講座・講演会・体験教室・zoom会議・企画展・パンフ作成・先進地視察などを実施
	Fukiya design.	誰もが自らの持ち味を発揮できる、適材適所で個々が輝く集団づくり
	けんもりOrihime研究会	Orihimeロボットで社会参加～遠隔地から地域交流を実現～
	NPO法人チーム響き	高校生が作る「想いを伝える」朗読劇の開催
瀬戸内国際芸術祭たまの☆おもてなし推進委員会	(グローバル事業助成)たまのチュードントガイドプログラム事業	

11/28 (月)	一般社団法人にみ木のおもちゃの会	「感激」のバンドラプロジェクト
	リポンの会	文化芸術活動の拠点づくり
	一般社団法人大江戸玉すだれ岡山中竹風会	マービー復興&竹風会10周年記念公演「竹のまちに笑顔の花を」
	高梁音楽祭実行委員会	高梁音楽祭2021
	美作の中世山城連絡協議会	美作地域の山城マップを利用した地域おこし
	鹿子の木会 長舗邸	みんなでシェアして輝く長舗邸プロジェクト
	岡山県女子体育連盟	岡山県女子体育連盟 第6回実技講習会～インクルーシブダンス～
	地域資源を生かす高校生コンソーシアムKURASHO	倉敷美観地区を次代に繋ぐ～歴史・文化・産業の学び場創造～



多種多様な、地域の特性を活かした 助成活動の成果を社会へ還元 2021年度 教育文化活動助成成果報告会



新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、本年度もオンライン成果報告会となりました。コロナ禍で活動を広げる場や発表する場が少なくなっているなか、出来るだけ多くの活動を聞いていただくとうとう4日間にわたり31団体に発表していただきました。4日間で延べ193名という参加者を迎え、報告書だけでは得られない、気づきの多い充実した発表に刺激をもらいました。

参加者の感想

- ・ どの団体様の発表も熱意が感じられ、制限時間内でわかりやすくまとめられたプレゼンテーションをされていて、素晴らしいと感じました。
 - ・ さまざまな課題をどの団体も抱えており、それをどのようにして解決したのかを伺うことができた時間でした。自分自身の活動にも生かしていきたいと思えます。
 - ・ これまでに助成された方の活動内容や活動趣旨などをリアルに伺うことができたので、とても勉強になりました。
 - ・ 色々な団体の方の活動が詳しく聞け、どの活動も「楽しい」が使われてきました。書面を読むのではやはり熱い気持ちは伝わりにくいです。よいエネルギーをもらいました。
 - ・ 内容は違うが、頑張る姿に連帯感を感じた。
 - ・ 分野は様々でしたが、子どもたちの成長や地域の方との繋がりなどで、様々な活動をされていて、自分たちの活動にも参考になる部分がたくさんありました。
 - ・ 自団体の活動の参考にさせていただける事例がたくさんあった。
 - ・ 画面共有の資料をもう少しじっくり見たい箇所などがあつた。
 - ・ 様々な団体個人の方がユニークな活動をしていらして、県北のご近所の方々も報告をされていて親しみを感じました。
 - ・ コロナ過で苦勞された方や、その中でも工夫して取り組んだこと等が特に参考になりました。自分の活動でスムーズに行えなかったこともありますが、共感する部分も多く勉強になりました。
 - ・ ワークショップの内容等を聞いて参考になる部分があつた。
- (参加者アンケートから抜粋)

審査委員のコメント

- ・ 非常に興味深く聞かせていただきました。どこにでもあるものではなくて、地域の特性を活かした活動が多く、そこに関わる人の思いや新しいことをやるワクワク感がのっかるといえるといういいカタチになっているように思いました。
- ・ 地域にある宝(資源)を上手に活用して、子どもの教育や次世代への受け渡しに関わっている活動が多く、面白いなど興味深かったです。岡山が豊かであることの証だと思いました。
- ・ コンテンツに学びの重点を置いている活動や体験や交流を目的とした活動など多種多様な内容で、いろんな視点があつて、いろんな対象者が参加する活動があつて参考になりました。体験や交流を通して心が動いたり、新しい自分に出会ったりできるのではないかなと思いました。
- ・ 地域に密着、各地域で多様な活動を改めて教えていただきました。こうした活動から生まれるコミュニティは地域の防災や安全につながると思っています。社会的インパクトが求められますが、そういった面だけの評価では測りきれない取り組みも、財団には引き続き応援していただきたいです。



地域へ飛び出せ

助成対象者の活動を広く社会に発信するため、初めての試みとして「高梁川流域マルシェand Fフェス」開催と「備前岡山京橋朝市」に参加しました。市民への周知と交流、そして新たな連携による新規事業創出の土壌づくりになることを期待しています。

岡山の教育と文化の アクティビストたちが集まるイベント 「高梁川流域マルシェand Fフェス」

2022年9月4日、一般社団法人高梁川流域学校と連携して倉敷市芸文館広場とアイシアターを会場に「高梁川流域マルシェand Fフェス」開催しました。

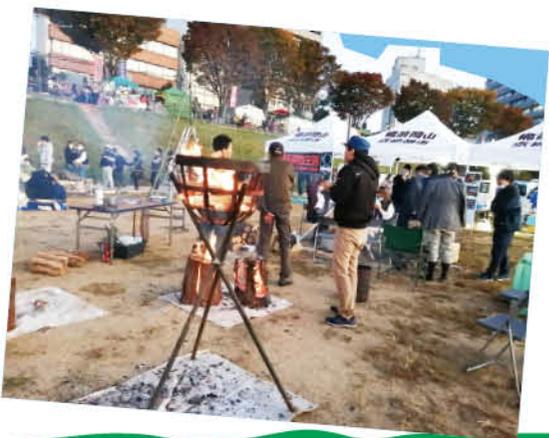
財団の助成先で備中エリアの10団体、高梁川流域学校が運営している高梁川志塾の卒業生5団体に参加。ワークショップやパフォーマンスを行い、更に地元産の食材を使ったお店7店がフードを提供するという地域活動団体が集まる新しい形の試みです。来場者は約400人。

参加団体からは「一緒に空間を共有していた団体の方と深く交流ができました。全団体としっかり交流できるまではいきませんでした。いろいろな活動をされている方々がいらつしやることを知りました。また、子どもたちがイベントの間ずっと飽きることなく楽しめていたこと、飲食もでき、全体を通してどなたでも楽しめる良い企画だと思いました」との声をいただきました。

毎月第1日曜日(1月は第2日曜日)に、 旭川沿いで行われている 30年以上の歴史を持つ 「京橋朝市」に6月、7月、9月、11月に参加

財団関係者や助成を受けた団体が京橋朝市に参加しました。6、7月は瀬戸内国際芸術祭のPRとして瀬戸内国際芸術祭を支えるボランティアサポーター「こえび隊」や会場となっている玉野市が主催。NPO法人岡山市子どもセンター、一般社団法人岡山に夜間中学校をつくる会はイベントのチラシを配布しました。

9月は国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》が中心となって活動をしている国吉康雄プロジェクトの「国吉祭2022CARAVAN in 京橋朝市」がお作りワークショップなどを行い、たくさんの子どもたちで盛り上がりました。11月はFukuya design「秘密基地生活」のメンバーが、スウェーデントーチや炭焼き体験、焼きマシユマロや燻製など楽しい美味しい企画で参加してくれました。「たくさんのご家庭に活動のコンセプトを伝えられ、大きな成果がありました」と参加団体から感想をいただきました。



助成先を訪ね歩く

助成を受けた団体や活動が地域にどのような影響を及ぼしているのか、岡山大学准教授の青尾謙さんに取材していただきました。今回は、鏡野町で活動している「鏡野鶴喜こども銭太鼓」です。



左から青尾謙さん、牧恵美子さん、池田民子さん

鶴喜こども銭太鼓 〜続けることで作られる「地域の伝統」〜 青尾謙(取材・文)

鶴喜地区

鏡野町の鶴喜(つるぎ)は鏡野町の中心部にほど近い地域です。鶴喜という地名は、もともと山賊の剣(つるぎ)から来ているという、やや物騒な由来があるそうですが、周囲はのどかな田園風景が広がっています。取材に伺った日はうららかな秋の陽差しをうけており、車を止めるとさっそく幼稚園の子どもたちに取り囲まれるなど、優しい地域の雰囲気伝わってきました。

銭太鼓

鶴喜銭太鼓(ぜにだいでい

こ)について、鏡野町立郷幼稚園の池田民子園長と、銭太鼓の指導をされている牧恵美子さんにお話を伺いました。銭太鼓はもともとこの地域のものではなく、山陰で安来節(どじょうすくい)等に合わせていた踊りが、昭和の終わり頃に、津山をはじめ県内各地で盛んになったものだそうです。

もとは竹で作っていた銭太鼓も今はポリ塩化ビニルのパイプで作っていたり、民謡だけでなく新たな流行曲にあわせて踊りを作るなど、それなりに「現代化」はされているようですが、地元の鶴喜小学校では1998年以降、毎年運動会や学習発表会で高学年の学童が銭太鼓を発表しているなど、既に20年を超える「地域の伝統」となっていることがわかります。

牧さんが指導されるこども銭太鼓グループは、地元行事や高齢者施設への訪問を繰り返しており、華やかな花傘を使った踊りを見る人に喜ばれているとのことでした。



卒業生―片山さん
牧さんから、銭太鼓の卒業生が岡山大学に進学していると伺い、お話を聞いてみることにしました。片山希海(のぞみ)さんは医学部保健学科看護学専攻の2年生で、将来は大学院に進み、助産師として岡大病院で働きたいという夢を持っていると話してくれました。学業の他にも生協活動にも取り組むなど、明るく、前向きな人柄が伝わってきます。片山さんは小学校1年から中学3年まで銭太鼓を続けていました。「何でかは覚えていないんですけど」自分からやりたい、と言って始めたそうです。銭太鼓は年に一度、約800名の観客の前に出る機会などもあったため、人前に出ることやインタビューを受けることが気にならなくなったと教えてくれました。

作られる「伝統」?

各地の「伝統芸能」と言われるようなものの中にも、実は意外と新しいものがあること



片山希海さん



はよく知られています。有名なものでは、インドネシアのバリ島の踊りである「ケチャ」は、20世紀前半に外国人が主導して作り上げたものと言われています。ただこうした「作られた伝統」(ホブスボーム)は、そうだからといって否定すべきものではなく、むしろ新しいものや意味を作り出すという役割を持っていることが多くあります。鶴喜の銭太鼓のお話を伺っていて、そのようなことを感じました。鶴喜こども銭太鼓はだいたい十数人のメ

ンバーで続けてきたそうですが、鶴喜も子ども数が減ってきており、また牧さんのような情熱のある指導者を得られるかといった将来に向けての課題は様々に存在します。それでも、片山さんのような若者が、この活動を通じて育っていったことはまぎれもなく、こうした地域での地道な取組と、小さな「成功体験」が色々なところで、花開いてくれることを願うばかりでした。

鏡野鶴喜こども銭太鼓
代表 池田民子
鏡野町・1996年設立



瀬戸内国際芸術祭スタディツアーレポート3

取材・文 江森真矢子（一般社団法人まなびと代表理事）
 昨年12月4日、プロジェクトの締めくくりとなる大人の学びの報告会が行われました。瀬戸内国際芸術祭2022に合わせ実施したこのプロジェクトで春から初夏にかけて行ったのは、豊島と直島のスタディツアーに参加してオリジナルツアーを企画する大学生のプログラムでした。夏には犬島での経験をヒントに探究する高校生のプログラム、秋には男木島・女木島を訪う社会人向けプログラムを実施。3つのプログラムに共通するのは「在るものを活かし、無いものを創る」チャレンジでした。



くらしの植物園でワークショップ



犬島の研修施設に集まって気づきを共有

非日常の体験を自分たちの日常につなげる高校生プログラム
 他校の生徒と、船に乗って、島に行つて、アートを体験する。その全てが高校生にとって大きな非日常体験です。夏休みに入つてすぐ、岡山県内各地から集まった参加者は12人。スタディツアーは、2班に分かれて犬島製錬所美術館と近代化産業遺構、島に点在する家プロジェクトを徒歩で巡り、島の「ごはんを食べくらしの植物園で合流してワークショップに参加、最後に島内の研修施設に集まって気づきを共有するという行程です。
 真夏の太陽の下でくつろぎながら、アート作品が日常の風景に溶け込んでいること、触れることに驚き、自然エネルギーを利用した美術館建築に興味を掻き立てられ、自分たちで摘んだ植物をブレンドしたお茶を味わい、と、五感で島とアートに触れました。また、その後は各自でこえび隊（瀬戸芸ボランティアサポーター）としてアート作品の受け付けやイベントの運営にも参加しました。
 そんな参加者に課された探究課題は「自分の地域の可能性を考える」こと。自分の暮らす地域について考えるとき、つい「ない」「こと・ものにばかり目が向いてしまうのは大人も高校生も同じです。在るものを活かしている、あるいは在るものを再認識させてくれる瀬戸芸開催地を獲得した、新しい目で自分の地域を見つめた何が見えてきたのでしょうか。
 夏休み明けの9月、報告会で発表されたのは「地域に沢山あるけれど使われなくなっている公園を活かし、「コミュニティの生まれる場」に」「伝統行事を通して自然の恵みの豊かさを体験してもらい、人々の交流をはかる」といったアイデア。同時に「アートがあることでその地域の歴史を知ったり、人と関わりを持つことができる」「新しいことを始めるときには周りの人の理解を得ることが大切だと思った」「瀬戸芸開催の奥にある人の思いや工夫を知り、物事を深く色々な面から見ようという気持ちが生まれた」といったそれぞれの気づきが語られました。



男木島で福井夫妻の創った
コワーキングスペースにて対話



ポスターのモデルになった島民と交流



女木島でアーティスト・五所純子さんの作品観賞

社会人たちによるスタディツアー報告会



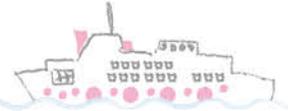
アートの触れ開放された大人たちの発想
 大人のプログラムは瀬戸芸の展示やパフォーマンスに触れるだけでなく、人との出会いや対話に溢れていました。最初に訪れた男木島では、瀬戸芸をきっかけにUターンし島の持続可能な未来づくりに取り組んでいる福井大和・順子夫妻と地域づくりについて対話し、女木島では作品展示中のアーティスト・五所純子さんに作品についてお話を伺いました。港では芸術祭のポスターモデルとなった男性にバッタリ会って交流する一幕も。
 そんなスタディツアーを経た大人たちのアウトプットは、自分の地域でのスタディツアーまたはイベントを企画するというものです。報告会で発表された企画に見られたキーワードは「自由」や「創造」。「ふだんの暮らしや仕事の中では難しいから」という動機を聞くこと少し胸が痛くなります。が、アートの触れやりたいことを問われたときに、自分が生きたい社会のあり方がはっきりと見えてきたのであれば、企画側としては喜ばしいことです。
 こうなつたらいいな、と思うことは創造の第一歩。発表後、すぐに実行された企画もありました。それは、何気ない風景の中にある心に引っかかるものを写真に撮り、言葉を添えて地図にマッピングすることで地域のオルタナティブな魅力を発見しよう、というイベント。在るものに目を向けて、新しい価値を生み出す試みが小さく、花開きました。



パフォーマンス鑑賞

瀬戸内国際芸術祭アートによる地域づくり視察プログラム 対象：社会人

オンライン学習①	瀬戸内国際芸術祭について
オンライン学習②	瀬戸内国際芸術祭サポーターこえび隊を知ろう
現地視察	男木島・女木島(作品やパフォーマンス鑑賞、島の人たちと交流)
報告会	「自分たちの地域のスタディツアー又はイベントをつくろう」の発表





私が、

「地域をリサーチし
動画作品へ」



文・黒川しのぶ
／玉島ARTプロジェクト(たまプロ) 代表

玉島に住む人の、各々が生きた時代の場所や建物の記憶を昔の写真や聞き書きで紐解き、それを基にダンスを創作。今の玉島の風景と共に動画撮影し、オンライン(WEBサイト・SNS)とオフライン(公演開催)で発信する。作品は無形の豊かな時間や玉島の風土文化を多様な人と分け合う機会をつくり、幼稚園児と保護者、高校生、大学生、高齢者、移住者などを巻き込んで制作し玉島の関係人口を増やす。

<https://www.tamapro-art.com>



活動をはじめた理由

僕が、



「医療・福祉・教育従事者の
思いを共有」



文・圓山典洋

／「ふくしのえんがわ」実行委員会 代表

意欲ある福祉職の人たちを主な対象に、地域とつながる医療・福祉・教育職のための学びの場「ふくしのえんがわ」講座を半年間連続して開催する。複雑化する社会課題を楽しくやりがいを持って解決するため、文化、教育など分野の異なる業種と連携して、地域活動や地域連携の種を創出し、新たな担い手の発掘・育成を行う。



2021年の年末に玉島の実家へ帰る途中、昔からよく知っていた建物が解体されてなくなっていました。大切なものを失ったみたいだに思った以上にショックで、居ても立っても居られず商店街を歩き、その風景を写真や動画に撮って家族に見せたのです。すると、橋や模型店、映画館など、各々の中にあつた思い出話が次々と溢れ出しました。建物や風景は、そこに関わった人の記憶を想起させるのだと実感した瞬間でした。

私はコンテンツボランティアダンスをしているのですが、同年に出演したアートイベントをきっかけに、地域をリサーチして作品を創る、アートを通じていつもの風景に違う視点を加える、日常が非日常に……そういったことをもって追求したいと思っていました。年末の出来事から「玉島にまつわる思い出をリサーチしたい」「それをいろんな人と共有したい」「作品にして残したい」そんな思いが膨らみ、「写真」「聞き書き」でリサーチして、「ダンス動画」で発信、という構想に発展していきました。

私が何をやりたいのか、すぐに理解してもらえなかったのですが、地域で活動している方や友人に、頭にあることを繰り返して必死に伝えていたところ、ステキな方々と繋がりが、頼りなかった構想が少しずつ現実化していき、この活動は継続して仲間を増やしていくつもりです。そしてこの先、まことに無関心だった人が、いつの間にかこの活動に参加していた、みたいなのことが起こると良いなと密かに思っています。



高校生へ聞き書きを説明

私は普段、介護福祉士として働いています。この仕事は、お年寄りの身の回りのお世話が一般的なイメージだと思われていますが、身体機能を改善するためのリハビリのお手伝いや、生活上の困りごとの相談を受け、解決方法を一緒に考え、必要なサービスにつなげるなども含まれます。その人が自分らしく生活できるようにサポートするためのすべての活動が、介護福祉士の仕事なのです。

しかし、病気や障害を抱える人たちは、様々な介護サービスを受けても、地域から徐々に遠ざかってしまい、自分らしさを失っていく人が多くいらっしゃいます。そんな現状にモヤモヤしていた時、岡山県社会福祉協議会の「無理しない地域づくりの学校」に出会い、受講しました。そこは、地域づくりを通して自分を見つめなおす場で、私と同じように介護や福祉にモヤモヤしている人たちが集まり、自分の思いを通して言語化していききました。

この受講が、自分を見つめなおす機会となり、同期生や、OB・OGとつながることができ、現在では、様々な地域づくりにかかわっています。「無理しない」は昨年度で活動を終了しましたが、私たちの仲間が他の地域で同じような学校を立ち上げるなか、岡山市でもできないかと受講仲間を誘い、学校の講師を務めてくださった先生にも協力を仰ぎ、今年度より名前を新たに「ふくしのえんがわ」として、活動することにしました。

この活動を通して、同じ悩みを抱えている、医療・福祉・教育に携わる人たちの「自分探しの旅」のお手伝いをさせていただければと思っています。



「ふくしのえんがわ」に集った人たち



FACE

あさののいさん

イラストレーター・漫画家

あさののい asano noi

1985年千葉県生まれ。2012年、東日本大震災を機に家族で岡山県和気町に移住。2016年、夫の転職をきっかけに奈義町に拠点を移す。奈義町での生活を綴ったマンガ「こんにちば、なぎさん」や、「老いと演劇」OiBokkeShiのイメージイラスト等を描く。2021年から長島愛生園に通い、入所者の方の書いた作品を読んだり、話を聞いて感じたものを作品「こんにちば、愛生園」にしている。

note
https://note.com/asanonoi

森分志学 moriwake shigaku

NPO法人だっぴ 代表理事

1990年、岡山県倉敷市生まれ。大学3年生の頃、自分が受けてきた高校の進路指導に違和感をもつ、それをきっかけに、高校が大人と出会い、将来を考える対話の場を高校生とともにつくる。卒業後は、教育系の広告代理店に勤務。2017年、NPO法人だっぴの理事・事務局長として岡山にUターン。岡山の中高校生・大学生を対象に、キャリア教育プログラム「中学生・高校生だっぴ」を岡山県内外12市町村20校以上の学校で展開。2020年より現職。

過ぎ去ってしまふ
小さな瞬間をすくい取る。

2008年『ちいさいおやじ日記』出版をはじめ、WEBで「こんにちば、なぎさん」を発信したり、長島愛生園の機関誌『愛生』で漫画の掲載をしているあさののいさん。読む人に癒しや温かみを与えるキャラクターやストーリーはどのようになり出されるのか。イラストや漫画を描く人・あさののいさんにお話を伺ってきました。(取材・文／森分志学)

千葉県に生まれたあさののいさんは2012年に和気町に移住した後、2016年からは奈義町へ。武蔵野美術大学で油絵を専攻し、卒業後はイラストを描くことを仕事にしました。小さい頃から言

葉で何か伝えることが苦手で、絵を描いてきたあさののいさんにとって、イラストの仕事は「口下手な自分が社会と繋がるためのコミュニケーションの手段」だそう。

『「こんにちば、なぎさん」は、ご自身の奈義での暮らしの様子や小さい頃の不登校経験についてなど、自分や周りで起こるエピソードを漫画に描きます。不登校経験を描いた漫画は、保護者から「不登校のわが子の状況に不安があったけど、漫画を読んで、過去に不登校でも大人になって好きなことをできている人がいる、ひとりじゃないんだと救われた」という感想も寄せられました。

あさののいさんは自分や身の回りのこと以外にも、長島愛生園の歴史や奈義町出身の偉人についての漫画も描いています。そこで大切にしているのは、虫眼鏡で見ていくように描くテーマを小さくすること。長島愛生園をハンセン病という大きなテーマで捉えるのではなく、そこに暮らす人として捉えます。その人が、朝目覚めて目を開けて天井を見る。それから起き上がるまでの間とそんなスケールでその人がその瞬間に感じたことの中にも、その人の「生きる」が詰まっていると考え、小さな瞬間を膨らませて漫画にするのだそう。そのため、「その人の思いを聴き取る力も磨いていきたい」と言います。

奈義町が生んだ医学者・井戸泰(いどゆたか)さんの漫画を描くときも、同じ景色を見るために生家の周りを歩いたりして当時の井戸さんを想像します。例えば、好きになった人のことを想像して、勝手に妄想が膨らんでしまったりするのと似た感覚で、偉人という異なる他者を想像し、その人が生きていたその瞬間に思いを馳せ作品に描いています。「たとえ異なる他者でも、小さな瞬間で切り取られたとき、自分と近い何かがある」と信じるあさののいさんの思いが感じ取れました。

あさののいさんにとって、漫画やイラストを描くことの魅力は、そのとき感じていたものを取っておく「宝箱っぽい」ものなんだそう。例えば、家族とのちょっとした会話。その小さなやり取りが自分にとって本当に大事なものであったりしますが、小さいがゆえに過ぎ去っていきやすい。そうした時間をあさののいさんは漫画で描いてアーカイブして、宝箱に貯めていく。その視点からあさののいさんの漫画を改めて読んでみたとき、そこに描かれる小さな瞬間と自分自身とを重ね合わせながら、日々の大事なものを見つけれられる、そんな読み方もあるのかもしれないと思いました。

体験記

開催日：2022年8月21日

プレゼンテーションの基本的「き」では、プレゼンテーションが上手になるコツを学びました。その体験をレポートします。(取材・文／黒部麻子)

プレゼンテーションの基本的「き」 —プレゼンテーションが上手になるコツ

みなさん、プレゼンテーションは得意ですか？ 私は正直、苦手です。決められた時間内で、自分の思いを上手に伝えることって、なかなか難しいですよね。どのようなプレゼンテーションをすれば、相手に伝わるのでしょうか。どうすれば上手になるのでしょうか。

講師の坂ノ上さんによれば、「プレゼンテーションをうまく行うためのコツは、助成金や補助金申請のための計画書作成にも通じるポイントです」とのこと。

はじめに数人ごとにZoomのブレイクアウトルームに分かれて自己紹介をした後、模擬プレゼンテーションが行われました。内容は、『聞き書き』の活動を行っている倉敷市内の高校生が真鍋島で報告会を開催したいので、費用の支援をお願いしたい」というもの。この内容を、A～Cの3つのパターンに分けて坂ノ上さんが作成したパワーポイントを使い、参加者のうち3名が、初見でプレゼンテーションを行いました。同じ内容で、特徴の異なる3つのプレゼンテーションを見ることで、応援したい気持ちになったのはどれか、どんな点に共感したのかを探っていきます。

私は、Aは文字ばかりのスライドだったので、内容がほとんど頭に入りませんでした。Bはアンケート結果などをグラフ化し、支援してほしい金額の内訳も明記されていて説得力を感じました。Cは、「聞き書き」の実例や写真がたくさん盛り込まれ、「説明を聞きたい」という気持ちに一番なったのですが、費用の支援という結論部分のインパクトは弱いように思いました。

参加者のみなさんから感想を聞くと、まさに十人十色。そもそも「聞き書き」とは何かという説明はAが一番しっかりしていたという人もいれば、Cは誰を支援するのがはっきりイメージできて良いという人もいました。

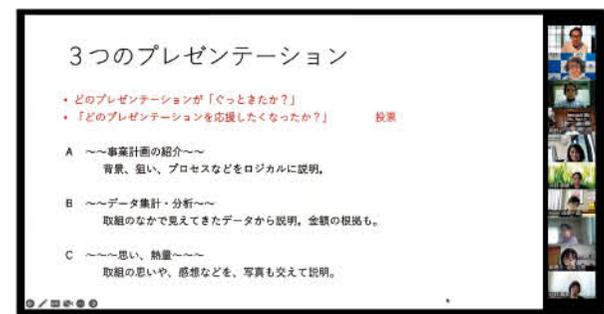
「Aはロジックに、Bはデータに、Cはパッション(思い)に、それぞれ重きをおいたプレゼンテーションです。何がどう響くかは相手によって異なることにも留意して、3つのポイントを落とさないようにしましょう」と坂ノ上さん。

「プレゼンテーションのコツ」というとつい、話し方や、身振り手振り、パワーポイントのデザイン等、表面的なことにばかり目がいきがちですが、もっと根本的なところが大事なのだと思いました。話の組み立て方次第で、見る側の印象が大きく変わることを考えると、人前で話すのが苦手でも、ポイントを押さえて準備すれば、じゅうぶん効果的なプレゼンテーションはできるんだと、自信につながりました。



講師：坂ノ上博史氏
一般社団法人 高梁川流域学校 代表理事

1978年倉敷市生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。在学中よりSOHO & テレワークの調査研究と共同事業開発に取組み、経営コンサル会社取締役を経て、独立。300社を超える経営指導と30社を超える創業支援を担う一方、自らも地元・倉敷を拠点に、サテライトオフィス『住吉町の家 分福』や、「高梁川流域学校」等のプロジェクトを手掛ける。



「豊かな島」と語らう美術館

豊島と書いて「てしま」と読みます。その島は文字通り、豊かな島だから豊島なのだとなりました。面積は約14.61km²。小さな島ながら、自給自足できるほど肥沃な土地と湧水に恵まれ、かつて盛んだった稲作は島外に移出できるほどだったといえます。標高340mの檀山には樹齢250年を超えるスタジイの大木が原生し、眼下に田畑が広がる麓には「唐櫃の清水」と呼ばれる水場があります。少し口に含むとほんのりとした甘みがある。近隣の集落には特徴的な石垣があります。板状の黒っぽい石を斜めに交互に積みあげた興味深い形状で、何度も足を止めました。山に入ると、石垣同様の黒い石が……。かつては多くの優れた石工が活躍し、「石の島」と言われるほど石材業も盛んな土地だったので、瀬戸内は少雨地域、貴重な雨が檀山の原生林に蓄えられ、豊島石で浄化され、田畑や人々の暮らしを潤し、石は集落を支える資源にもなってきたのです。

豊島美術館は、瀬戸内国際芸術祭を機に再生された見事な棚田近くの唐櫃丘にあります。大地から自然に盛り上がり生まれたような曲線を描く建築で、靴を脱ぎ入る内部空間は、豊島が一つの生命体であるなら、その胎内に入るかのような感覚。天井の2つの丸い開口部からは光と風が柔らかく注ぎ、低く緩やかに広がる空間に柱は一切なく、床には水滴の他はほほ何もない。足元の水の玉はこの上なく美しく、触れてはならぬほど崇高な生き物のようにゆっくりと移動していきます。島の自然の尊さを、豊島自身が静かに語っているような場所。とても心が鎮まりました。四季折々に時と共に移ろう島の話を聞きにまた来よう。表紙絵はほんの数分傍にいた水滴を、写真不可のための鉛筆スケッチをもとに描きました。



タケシマレイコ TAKESHIMA Reiko

グラフィックデザイナー
／イラストレーター
岡山県岡山市生まれ。高校時代から5年間油彩画を学ぶ。女子美術大学芸術学部芸術学科卒業。エディトリアルデザイナー羽良多平吉に師事。氏から「デザインと編集は、作り手の生活と直結している」とを学ぶ。帰岡後独立。届けたいことを、届けたい相手に、心を込めて伝える贈り物のようなビジュアルコミュニケーションを目指し、県内外で活動中。また、「生活芸術」と名付けた暮らしに即した制作活動もしている。「FUEKI vol.60」からデザインとイラストレーションを担当。倉敷市立短期大学非常勤講師。

Editor's Column

■事務局長を務めて丸8年、この編集後記を書き続けましたが、今回で卒業となります。■2015年4月、初仕事はいきなり海外。米国ワシントンDCのスミソニアン美術館で開催された大規模な国吉康雄展を視察し、岡山市出身の国吉を顕彰して地域振興につなげようとする企画でした。同年には、岡山大学への国吉康雄寄付講座がスタートし、対話型鑑賞等ユニークで先進的な教育が続いています。■2018年には、基本財産の大半をしめる株式の減配で、大幅な収入減がありました。事業の大幅な見直しが余儀なくされ、大胆に経費を削減、特定助成事業の相当部分を中止、縮小しました。一方で、財団の最も大切な事業である、公募助成事業は規模を維持しました。その後、寄付や増配等で財源の問題は解消され、現在は安定的に推移しています。■2020年には、新型コロナウイルス感染症が世界を席卷し、国内でも緊急事態宣言が何度も出され、日常生活そのものに大きな影響が出ました。申請された助成事業は、翌年への活動延期を可能としましたが、それでも実施できなかった助成団体も多くありました。そういった中、一方では、オンラインをフル活用し、エリア別情報交換会、テーマ別情報交換会を開催し、助成団体相互間の交流機会を積極的に増やしました。また、成果報告会も複数回にわたってオンライン開催し、従来にも増してしっかりと報告内容が伝わる等の評価もいただきました。■さて、本年は、1986年に財団が設立され、38年目を迎えます。今後とも、地域の皆様の活動助成を通じて、益々幸せなコミュニティとなっていくことを目指してまいります。引き続きよろしく願いたします。そして長い間ありがとうございました。(O)



公益財団法人 福武教育文化振興財団

人づくり、地域づくりを応援します



福武教育文化振興財団
ウェブサイト



コミュニケーション・
マガジン
and F and E

〒700-0806 岡山市北区広瀬町1番5号
株式会社ベネッセコーポレーション広瀬町社屋
TEL: 086-221-5254 FAX: 086-232-3190
URL: <http://www.fukutake.or.jp/>
E-MAIL: eczaidan@fukutake.or.jp

機関誌 **不易**

FUEKI vol.80 2023.1.25

編集・発行：公益財団法人福武教育文化振興財団
制作：株式会社吉備人
デザイン・イラストレーション：タケシマレイコ
印刷：研精堂印刷株式会社